老人たちが語る昔の坑内生活

これは、敬老会に参加した数人の老人の皆さんから聞いた話。

カンこそ何より正確 男を追い回す女坑夫

暴れ馬の思い出

――皆さんは坑内にさがって働かれたことでしょうが、どんなお仕事を。

Sさん わしは大正七年から宮浦鉱の坑内で、馬丁として働いたが、兄貴も坑内馬丁をしよりました。わしの馬は手のつけられぬ暴れ馬で、その馬を馴らすために、わしは毎日草を刈ってさがっては食わしたりして手なずけたから、わしのいうことだけはきくようになったが、ほかの人間は、ほんとにけちらかされるので、寄りつけなかったたんも。

――馬といえば、もちろん石炭運搬でしょう。

Sさん 幹線坑道には電灯もつき、ハコ（石炭運搬車）をホーリングやエンドレスで捲きあげよったが、切羽部内から幹線坑道までの支線での石炭運搬を、馬でやりよったとたん。

Mさん わしは、初め人事関係の仕事をしよったが、あとでは坑内の運搬工などとして働いたが。

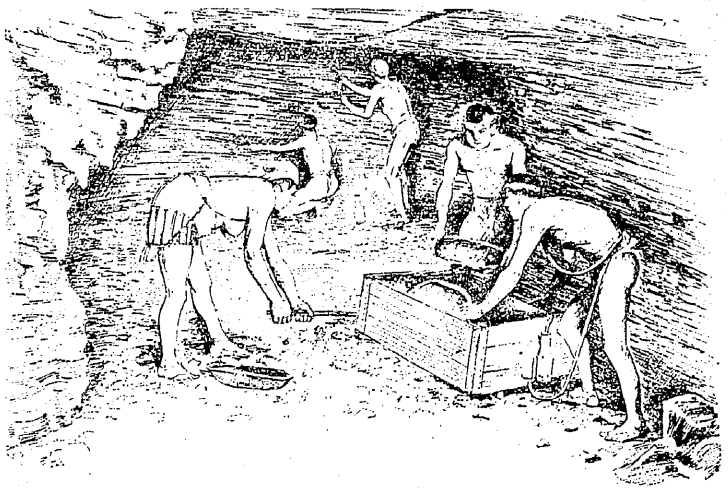
――今年は七人も、坑内で起きた災害で死者を出しましたが昔の坑内はあぶなかったでしょう。

Sさん いつか、命拾いしたことがあるが。わしが暗い坑道を、馬をひきひき歩いていると、うえの方から「カラバコがうっ走ったぞー」、と叫び声。気がついたときにはもう、うっ走ったハコがつい鼻先にきていた。思わず炭壁にしがみつくようにして、その場にうつ伏せになり、命だけは助かったが、わしがひいとった暴れ馬も生きもの。身の危険は畜生にもわかると見え、気づいたら、これまたわしの体に自分の体をピタリとくっつけて、ほうとったばん。あの太い体だから、どこか、走り去ったハコからこすられどまったろうがの。

17人も死んだ落盤

――落盤にあわれたことは。

Sさん 落盤で、十七人ばかりいっぺんに死んだこともある。ダイナマイトをうったあとの部内の詰所で、ちょうど昼めしをたべよったところが、ドーンという音。めしをかみかみかけつけたところ、大落盤。その下に埋まったまま、一人は頭だけ出していたが、落盤のなかからも「早よう出してくれー」、という声がする。あわてて掘り出そうといそぐと、ザザーッとまた落盤。もう、埋まった者の肺のなかは、吸いこんだスミでザクザクしよるくさんも。それでも、一人だけは助け出すことができたが。



遠い昔の採炭切羽の作業

カンこそが正確

Mさん だいたい、雨ン降りよる坑底があぶなか。雨も、清水なら大丈夫。にごっておれば、かならず大バレ。地鳴りが三、四日も続けば、落盤間違いなし。

ガスもれもあったが「これはあぶない」ということは、働くわしどもにはカンでわかった。どんなに、ガスが無色、無味、無臭であろうと。学校出たばかりの係員たちがよくぶったおれよったが、連中のもっとる測定器なんかよりも、働く者のカンの方がよっぽど正確やった。測定器は故障しても、カンは故障することもなし。

たとえガスでも、恐れたことはなかった。空中に向けて思いっきり水を噴かせる。すると、ガスはその水に溶けて流れてゆくから、空気中のガスはそれだけ薄くなってゆく。

Mさん 十八時間ぶりだった。

丸裸の切羽生活

――切羽で働くときなんか、昔は素っ裸だったとか。

Yさん 熱かったからの。

――それでも、女はヘコ。

Yさん それは、ていさいをつくらうようになった、あとでの話で、初めのころは、女坑夫も男のわしどもといっちょん変らん、マル裸やった。素っ裸でいてさえ、滝のように流れる汗のなか。ヘコでもしめとったら、男のキンタマでも腐りよったのに、おなごなんかたまったもんかん。

Mさん ある日、わしが素っ裸で昼寝しとったところが、あれをネズミにくいちぎられての。「それは大変」、と町の医者につれてゆかれたところが、医者も「こらあ、どんこんしょんなかばな」というだけ。とにかく昔の坑内には、ネズミがぞろぞろやったから。

いさましい女坑夫

Yさん ところで女坑夫のなかには、あのやわ肌に入墨なんかしとった親分肌の者もおっての。

Mさん 若くて、むぞらしか（可愛いらしい）男の新入りでもあれば、「よし、あれはオレのものだ。筆おろし（貞操を奪うこと）は、オレにまかせておけ」というわけで、親分肌の女坑夫たちが争って追いかけまわすもんだから、新入りの男坑夫の方が「こらア、たまらん」と逃げまわりよった。

Sさん すごいのがいての。

×

話は尽きなかったが、あとはいろいろのつごうで割愛。

ある対話

黒鉛筆 久しぶりだな。あんたがあんまり短うなっとるけん、見知らんじゃった。

赤鉛筆 三井さんは、黒字でん「赤字」ちいうて、俺ばかり使わすけんな。もう三井さんには、あいそがつきた。こげん酷使さるるなら、体がもてん。

黒鉛筆 「赤字」「赤字」とおめき散らす一方で、しこたまためて、そとで会社ばつくって、そこでもうけらす。

赤鉛筆 はがいかな。日本じゅうに叫び散らしたかが。なんとかせんなら、いかんな。

×

〃日刊みかわ〃から抜すい。

年令忘れ悦び合う

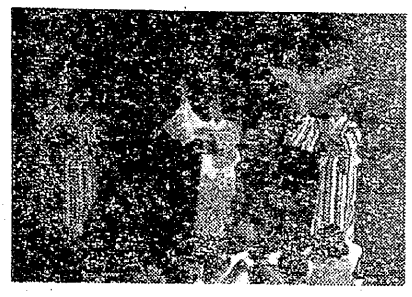
終日湧いた〃敬老会〃

恒例の、三池主婦会主催の〃敬老会〃（十一回目）は、十一日玉名温泉〃玉楽館〃で開催。百三十六人の老人たちが、待ちかまえていたようにして参加した。

今年は、参加の老人たちのなかから、八十五才の関戸与次郎さん（宮浦支部。月見ケ丘社宅）と、八十八才の徳永スミさん（四山支部。猫宮）が、最高年令者表彰を受彰。

舞台では、三池主婦会員の手踊りなどが花と咲き、終始拍手が会場いっぱいに鳴り響いていた。

今年の特徴は、何といっても参加老人の間からの飛び入りが多かったこと。なかには、年令を忘れて、しっかりとした手足でみごとな踊りを披露した老婦人もいて、そんなとき会場からは心をこめたはげましの拍手が贈られた。（別項の「老人たちの思い出話」を参照して下さい）



（写真は、三池主婦会の踊りの出しもの）

11・9めざし結集

三川指導部　家族ぐるみ体育祭

三川指導部では、きたる十一月四日（日曜）に〃統一休育祭〃の開催を計画、準備をすすめている。

が、同指導部では「迎える一一・九への結集をはかるためにも、今後の命を守るCO・遺族闘争を中心とする闘いへの決意と団結を示すために、この体育祭を行う」のだという。

まさに家族ぐるみの体育祭で、地域分会、主婦会組織、職場分会がA・B・C・D・E・Fの六ブロックに分かれ「運搬作業C級」「聖火リレー」「玉入れ」「ボーリング大会」「幼児がんばれ」それに「班会議」「実力行使」など珍妙な種目で腕を競い合うことになる。

同指導部統一体育祭の成功を心から祈っておこう。

女の目

ポンコツ車

K・まち子

八月〇日

主人が、知人を通じてポンコツ車を安値で買って来ました。

主人は、子供のようなよろこびよう。

けれどもしばらく立つと、どこか悪いところでもあるのか、電気スタンドと蚊取り線香をもって車の下にもぐり、夜の更けるのも忘れて何やらコツコツやり出しました。

お茶の差し入れにゆくと、油で汚れた手を差し出し、油にまみれた顔をにっとほころばせるのでした。

そんなのが苦になるどころか、いかにも楽しいといった表情さえ伺われる主人でした。

八月〇日

主人がめずらしく車の中に居ましたので中をのぞきこんで見ますと、何と今度はハンドルをはずし、部品をバラバラにしています。クラクションが鳴らなくなったのだそうで、何となく私も心配になって来ました。

八月〇日

主人が帰って来ました。やたらとクラクションを鳴らしているところを見ますと、どうやらなおったらしく思われました。

でも、なかなか車庫から出て来ません。いって見ますと今度はドアーのガラスの水切りが腐蝕していて、ドアーの中に落ち込んでいるのを取り出して修理をしているところでした。

そんなところを見て、近所の人はいいました。

「お宅のご主人は、自分で車をなおさるるげんよかですたい」

新車を買うなど夢のような現在の生活では、こんな、近所の人びとのお世辞にも、ひがみたくなって来るのです。

×

三川指導部九分会（坑外）

新聞〃はぐるま〃から、紹介しました。主婦会員皆さんのご投稿を切にお願いいたします。

また、全国の〃CO・遺族守る会〃の婦人会員皆さんのご投稿も大いに歓迎いたします。特別原稿用紙など要しません。便せんか、便せんがなければ、ただの用紙で結構です。

どうか積極的にご投稿いただきたいと思います。

生き甲斐感じた一日

みやうら退職者会の日帰り行事

みやうら退職者集る会では、去月二十三日（秋分の日）夫婦同伴にて、泉郷船小屋に日帰りバス旅行を行った。

参加者は会員三十九名。主婦二十三名。

飲むほどに、酔うほどに、皆よくしゃべる。旅館の出しものにつられ、仲間の一人二人と踊り出すしまつ。

「やっぱり長生きせんなんの」

「さあまたあしたから、がんばるぞ」

だれからとなく、いう。

「来年もまた」の合言葉を耳に残し大牟田へ。生き甲斐のある、尊い一日だった。

×

三池退職者協議会新聞〃三池退職協〃（NO・6）から抜すい。